

グエン イニイ

ベトナム出身

麗澤大学 外国語学部外国語学科

ベトナムの高齢化社会について

統計総局によりますと、ベトナムでは 2019 年の満 65 歳以上の人口は 770 万人で、人口の約 7.7% を占めています。日本と同様、ベトナムは高齢化社会に突入しつつあり、2036 年までにはベトナムの高齢者の総人口に占める割合が 14.2% に達すると予測されます。2055 年までに高齢者は 2,230 万人(人口の 20.4%) に増加すると予測されています。高齢化社会から高齢社会への到達年数は、日本が 24 年であったのに対しベトナムは 18 年と、高齢化はかつての日本を上回る速さで進むと予想されています。

高齢化社会に入ると、高齢者の面倒を見ることが負担となると予測され、今後、誰が介護を行っていくかが課題になります。ベトナムでは伝統的に「子は高齢の親と同居し介護するべきだ」と考える人が多いです。そのため、現在ベトナムでは子供が結婚し、最初は別居しても、両親が高齢者になったとき、親の介護をするために両親を呼び寄せて一緒に暮らすことが多いです。介護をする家族は、まずは子供の中から相談の上で対応可能な人を決めて、場合によっては、仕事を辞めて介護にあたることが多いです。

一方、現在においても親を介護施設に入ることはベトナムの伝統に反するという考え方から抵抗を持つ人や、子が親の介護を放棄したと考える人も多いです。介護士や医療従事者が関わっているケースはまだ少なく、全体の 0.1%、0.2% を占めるだけです。しかし、現在ベトナムの高齢者のうち、子供と同居する割合が減少し、独居、高齢者のみの世帯は増加傾向にあります。今後、高齢化社会に入りつつあるベトナムは、老人ホーム

などの介護施設の要求が増加すると予測されています。現在、ベトナムでは一般的な老人ホームの評価はまだ高くないですが、今後施設介護が様々に改善されたら、老人ホームに対する抵抗感は減ると思います。

このように、親孝行を大事にする文化があるベトナムでは、今後高齢者介護に対して、家族の役割認識がどのように変化するでしょうか。現在のベトナムは、高齢化の進展に伴い、経済発展や産業構造の変化による労働人口の都市部への流入、家族介護を最善とする家族観など、1970 年代の日本と状況が類似している側面があると考えられます。社会と文化的に相互に理解可能な点も多い日本の過去の経験を参考に、今後ベトナムは現在の日本社会のように変化するのかを明らかにしたいと思います。特に、ベトナムと日本の家族の中での高齢者介護の役割認識の共通点と相違点をより詳しく理解したいと思います。以上のことについて私はさらに研究してみたいと考えます。

以上